

悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子

イラスト/清水直子



第15回

お母さんたちが地域を動かす

❁ 久しぶりに釧路を訪問、
懐かしい人たちと再会

11月20日と21日、久しぶりに北海道の釧路市を訪れました。現地の患者会との交流が始まり、国立成育医療センター（当時）に勤務する小児アレルギー専門医とともに初めて釧路を訪ねたのは2005年5月。その時、真剣に専門医の講演に耳を傾け、わが子が受けていた医療が実は適切でないことに気付き、その後、適切な医療のもとで劇的に健康を回復した子どもたちのお母さんに、何人も会うことができました。

その中の一人、S君は2005年当時、重篤な食物アレルギーで、根拠のない「食物抗原強弱表」による徹底除去を強いられていましたが、

適切な診断と必要最小限の除去、耐性誘導療法の結果、今ではすべての物が食べられるようになっていました。またやはり5年前、「何とかして」と訴えるように、先生の前にアトピーがこじれてグローブのように腫れ上がった両手を差し出したM子ちゃん。重症アトピーで、あまりの痒さに生まれて4年間、親子で一度も夜まともに寝ることが出来なかったM子ちゃんも、今では症状もなく、しるしるカピカピの肌で元気に暮らしていることが分かりました。「医療の質」という言葉があります。5年前の釧路訪問ではアレルギー医療にこれほどの「落差」があることに私たちも驚き、釧路のお母さんたちもそのことに気付きました。

素晴らしいのはその後のお母さんたちの活躍です。わが子のことだけでなく、地域で困っている人たちのために、議員を動かして行政も動かし、とつとつ市立病院への小児アレルギーの専門外来開設にこぎつけました。わずか月に1回ですが、東京から専門医の派遣を受け、地域の「灯台」になっています。

❁ どこに住んでいても

適切な医療を受けたい

こつとした医療の実情は全国どこでも同じです。どこに住んでいても適切な医療を受けたい、それが患者の願いです。本来ならそれは医療側の課題ですが、問題に気付いた患者が行動することで地域を動かすことができる、釧路のお母さんの活躍は、それを表していると思います。



そのべ・まりこ ● 神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。